

人と繋がるということ

薬剤師 小見川香代子（青山キャンパス）

痛快な太田先生の話に、引き込まれた。

医療と介護のギャップ、医療と在宅医療の違い、そんなことが頭の中をぐるぐるめぐり、歯に衣着せぬ話のなかに、自分の中ではっきりしていなかったことが少しだけ見えてきた気がする。

○病院が命を救うところなら、在宅医療は生活を支えるところ

病院の薬局で仕事をしていた頃、自分の中で受け入れられないことがあった。それは、死を予測するという事だった。

病院で働いてしまうと当たり前のことのようだが、私には受け入れられなかった。

人員の体制や、大型連休の際の薬の手配などの関係上、薬をどれくらい保管したらよいのかその人の命の長さにかかっていた。

在庫を抱えることで厳しく先輩にしかられた。

使わなくなったものは、返品するだけのことなのに、在庫金額をうるさくいわれた。

中小の病院では、仕方がないことなのかもしれないが、純粋に薬を使うことで命を長らえてほしいという気持ちは打ち砕かれた。

薬剤師って何なのか、自問自答しながら今日まで来た。

○在宅は人の生き様

薬局に来てもらいたい話をせずに変えるおばあちゃんがいた。

こちらからの問いかけにもあまり答えてくれなかった。

ところが、電話を何度もかけてくる。自分で薬の本を買い、かなり詳しいことを質問する。

薬剤師からすると、ちょっとやっかいなおばあちゃんに見えた。

ある日、薬を届けることになった。パーキンソン症候群なので固まってしまうと動けなくなるからだ。お部屋まで案内してくださった。

いろんな話を聞いた。彼女はお医者さまの奥様だった。元気な頃は、「兼高かおる世界に行く」という TV 番組にあこがれ、ご主人と世界一周をしたという。

若い頃は、行動派で当時は中国なんて誰も行かないところを、一人旅したことも話してくれた。楽しそうだった。こんなに話し好きな人とは思わなかった。

一人で暮らしていることもあり、ご自宅に薬を届ける在宅医療に関わるようになった。家に伺うと、たくさん話をしてくれる。

もちろん、体調のことも話す。時間が来ると体が固まってしまう悩みや、夜

になると眠れない話など、いろいろ話してくれた。

話の中で、彼女の一番の思いは、人前で迷惑をかけたくないという思いだった。だから、くすりはそのときのために取っていた。

一人の時は、動かなくてもよいが、誰かと会うときには自分の具合で気分を害されるのではないかと、不安に思っていた。

そんな彼女と寄り添い、薬を届けている。

先日、担当者会議とって彼女を支える様々な担当者が集まった。

冒頭彼女はこう言った。

「私は最初の頃、誰かが部屋に入ってくることがとてもいやでした。部屋の中を見られるということはとても、恥ずかしいことだと思っていました。……でも今は、皆さんがいてくださってこそ、私が動けるのだということに気づきました。本当にありがとうございます。」

私は、胸を打たれた。

部屋に入ってほしくないから、動かない体で薬局に来ていたんだ。

あまり薬局で話さなかったのは、動かない自分に薬局で長話はさせないでほしいというサインだったんだ。

世界中を飛び回る活動的な人が、拘縮になやまされ部屋にいる気持ち、私は考えたろうか。薬をお届けしたからこそ、たくさん話もできたし、本音も聞けた。

今では、体調のことだけでなくいろいろな話をする。

○人は必ず死ぬ

認めたくない事実だが、そうなのだ。

だから、より楽しく、より自由に最後は終わってほしい。

自分だったら、そうしたい。

病気になる、老いるということはそれだけで自由が奪われる。

だから、私にできることをさがす。

薬剤師である自分は、私の中のほんの一部。

人として、薬と関わりながら、どうしていききたいのか、未だ探し続けている。